

第3節 古代の街道に係る歴史的風致（せっぽういし だいもくおどり説法石と題目踊）

1 西国街道の歴史

西国街道は、京都の東寺口から摂津西宮、さらに兵庫を経て中国・九州の西国へと通ずる幹線道路である。向日市においては、古くからの街道としてもっとも市民に親しまれ、街道沿いにはその歴史を物語る史跡や石造物が数多く残されている歴史的な街道である。

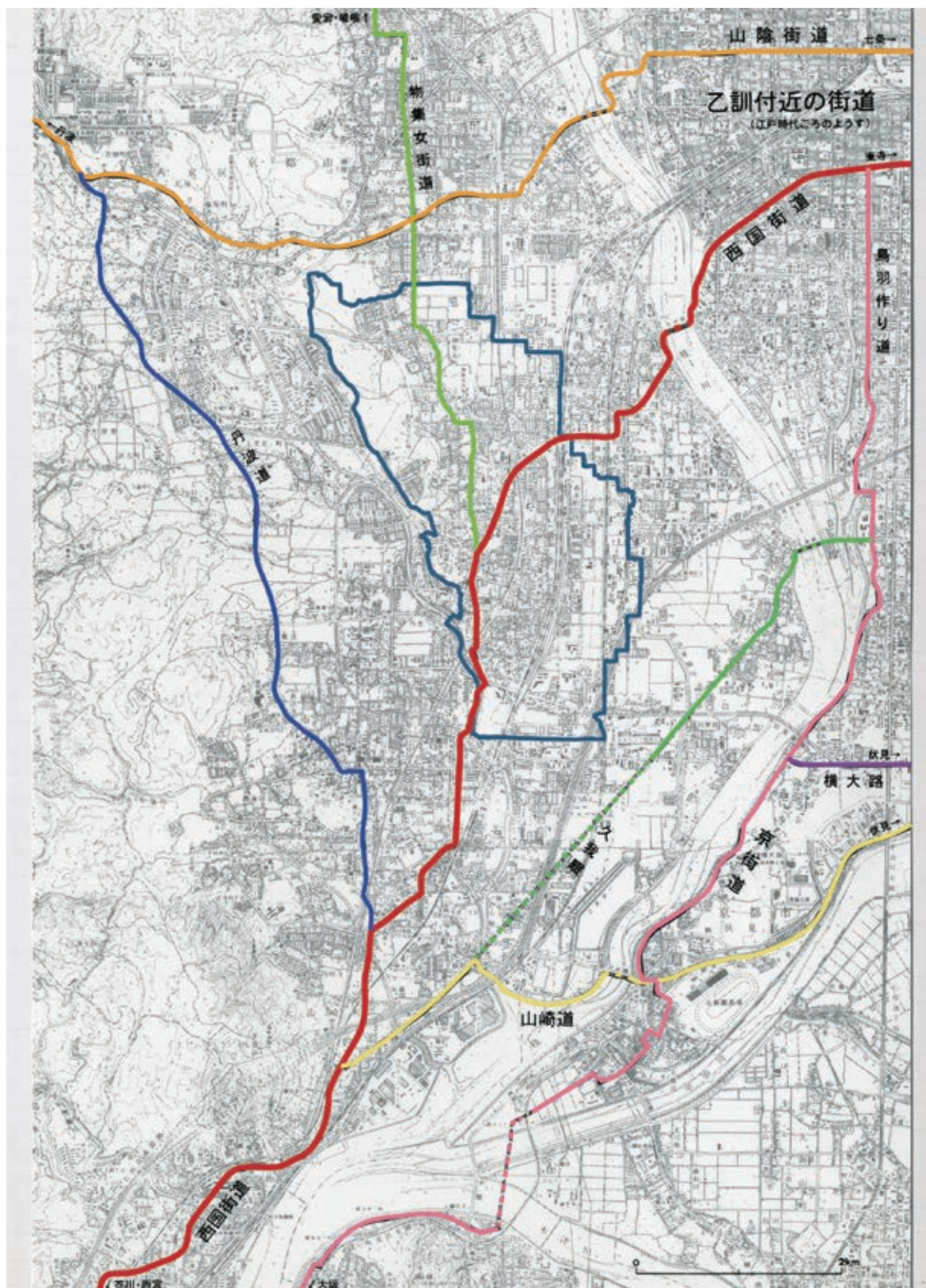


図 2-3-1-1 乙訓付近の街道 ※青で囲んでいるのが現在の向日市域

向日市域を含む乙訓地域は、この地に長岡京が営まれていた時期には全国各地からの道が集まる日本の中心地であったが、延暦13年(794)10月に平安京へ遷都されて以降は、平安京・京都へ向かう道筋の通り道となり、都の西南の入口として重要な地域となる。

西国街道の前身は、平安時代には山陽道、播磨大道などの名称で呼ばれる道であるが、平安時代の山陽道と考えられてきたのは、現在の西国街道から大山崎町北部で分岐し、直線的に久我^{こが}(現在の京都市伏見区)に至り、桂川を越えて鳥羽の作り道につながる久我噺(久我縄手とも)の方である。しかし、紀貫之の「土佐日記」承平5年(935)2月11日～16日条には、赴任地土佐から都へ帰る途上の貫之が、山崎(現乙訓郡大山崎町)まで船で到着し、そこから上陸して牛車で都へ向かう時に、「しまさか(島坂)」で「あるじ(饗応・もてなしのこと)」を受けたのち、月明かりのもとに桂川を渡ったことを書き記しており、この島坂が現在の向日市上植野町の西国街道沿いに残る通称地名であることから、向日市域を通る西国街道も、平安時代からすでに存在していたことが確認できる。

久我噺が直線的に斜行する乙訓南東部は桂川に近く、宇治川・木津川との三川合流地点にも近接する低地である。河川の氾濫の影響を受けやすい低湿地を通る道はぬかるみやすく、通行には必ずしも適さない。これに対して、乙訓地域のほぼ中央部を北上する西国街道は、段丘上の高燥地を通る部分が多く、利用しやすい道であったと考えられる。直線的に延びるという古代の官道の特徴を有する久我噺は、平安京遷都直後に設置された道と考えられ、鎌倉・室町時代の記録にも登場し、江戸時代の絵図類にも記されるが、西国街道に比べると徐々に道としての機能は低下し、明治中期の地図では水田の中を通る、西国街道と比べてかなり細い道となる。現在ではほとんどが消滅し、下植野(現在の大山崎町)や久我に部分的に残るのみとなっている。



図 2-3-1-2 明治 22 年 (1889) 頃の乙訓

平安京・京都へと向かうもう 1 つの重要なルートとして、物集女街道がある。西国街道から向日町で分かれ北上するルートで、沿道に物集女車塚古墳や檜原廃寺（現京都市西京区）など多くの古墳や古代寺院が所在するところから、こちらも段丘や向日丘陵の縁辺部を縫うように通る、古くからの街道とみられている。向日市域を外れてすぐの檜原（現京都市西京区）で山陰街道と交差し、ここで右へ折れると平安京の七条に至る。左へ曲がれば老坂（現京都市西京区）を越えて丹波に至る。

先に述べた「土佐日記」での紀貫之の都入りの記述では、島坂を経て桂川を渡ったとあるが、向日町以北は、西国街道を通ったとも、物集女街道から山陰街道に入って京都に至ったとも、どちらでもとれる内容である。沿道に史跡の多い物集女街道に比べて、向日町～東寺間の西国街道のルートは古い時代の確証に乏しかった。例えば宝徳 4 年 (1452) に相国寺の寺僧、瑞溪周鳳が有馬温泉へ湯治に行くときには、山陰街道から物集女街道を経て西国街道に入るルートを輿に乗って旅しているなど、鎌倉時代から室町時代にかけての軍記物・日記などには西国街道よりも、物集女街道を使うルートの方

が多く使われているようである。

しかし、向日町～東寺間の西国街道沿いでも、20年ほど前から沿道の発掘調査で、平安時代にさかのぼる遺構や遺物が発見されており、こちらも久我畷や物集女街道と同様に歴史の古い街道であることが、次第に明らかになってきている。

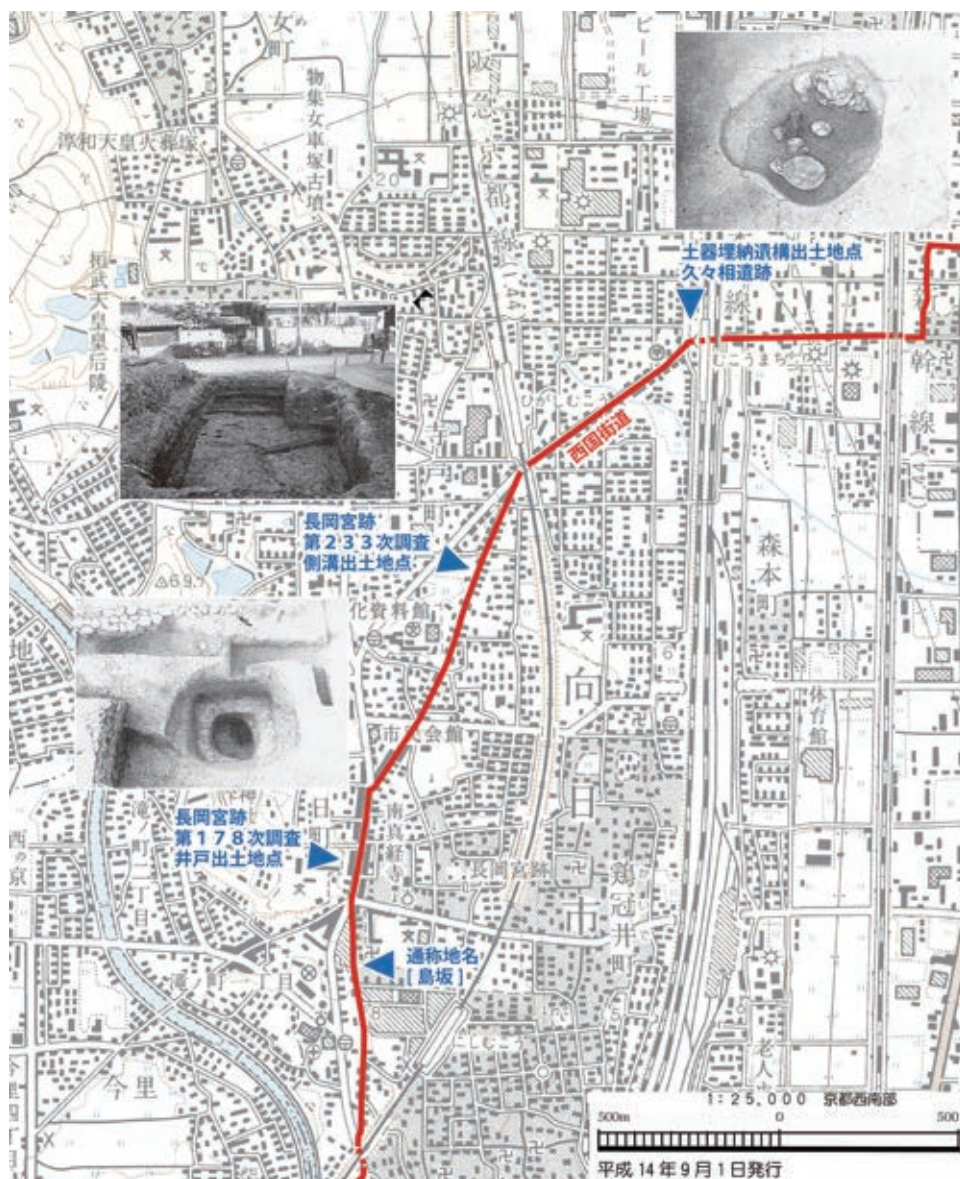


図 2-3-1-3 西国街道に沿った平安時代の遺構

平安時代から都へ通ずる街道としては存在しながらも、久我畷や物集女街道に比べると目立った存在でなかった向日市・乙訓地域における西国街道が、にわかに主要な街道としてたち現れてくるのは、豊臣秀吉の時代である。すでに天下人となっていた秀吉は、天正19年(1591)9月、朝鮮への派兵を発令し、翌20年3月に出兵の前線基地として築城した肥前名護屋城へ向けて自ら出陣する。朝鮮へ向けて多くの軍勢と物資を送る必要が生じた秀吉は、この前後に西国街道を拡張・整備している。そのことがもっとも顕著に確認できるのが、向日市域を含めた乙訓地域である。

すなわち、向日市寺戸町内の西国街道沿いでは、江戸時代初頭の検地帳に「道成分」とあり、「是ハ文禄元辰年高麗御陣之時、道二成」と朝鮮出兵の時に拡張して道になったため、水田面積を減じている記録が残る。この他、桂川に近い築山村(現在の京都市南区)には、「(西国街道が)唐道と申し候

は太閤様唐入りの節にお作りなされ候ゆえ、道筋字を唐道と申し候」との江戸時代前期の古文書が伝わる。ここで述べられているように、江戸時代の乙訓地域では、西国街道は「唐道」や「唐海道」の名で呼ばれることが圧倒的に多い。秀吉の朝鮮出兵は、半島を経由して明国まで攻め入ることを企図していたといわれており、朝鮮・明との連合軍との戦いであったため、当時一般には「唐入り」と称されていた。西国街道は唐入りのため拡張された道、そして秀吉によって整備された道として、江戸時代を通じて記憶され、「唐道」「唐海道」の名で伝わるようになった。

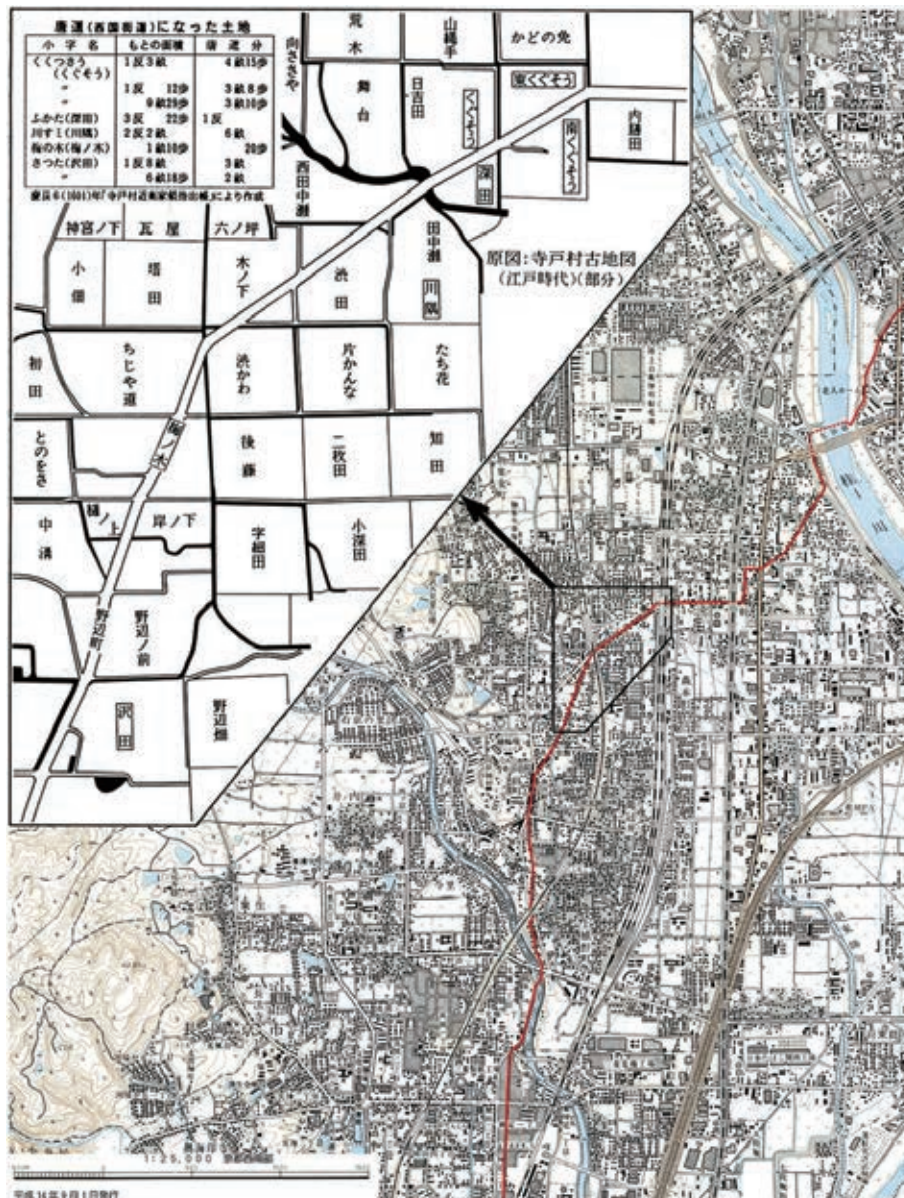


図 2-3-1-4 西国街道の整備

※現在の向日市寺戸町付近の拡幅の様子、赤線が西国街道

また、この時に街道整備と時を同じくして、京都を出てまずはじめの休憩地点として整備されたのが向日町のまちなみであり、以後、乙訓屈指の町場として江戸時代～明治・大正・昭和に至るまで繁栄することとなる。(第2章第1節参照)

江戸時代に入ると、幕府による街道整備が進められ、山崎以西の西国街道は「山崎通(やまざきみち)」の名で主要街道に準ずる脇街道として管理されるようになる。山崎通は、大名行列が京都へ入る

のを嫌った幕府によって、東向きに下植野を通り桂川を渡って伏見に向かうルートと定められた（図2-3-1-1「乙訓付近の街道」参照）。このため山崎から向日市域を経て東寺に至る部分の西国街道は、幕府が管理する主要街道とはならなかった。この区間の西国街道に、江戸時代を通じて秀吉の開いた唐海道という由緒が濃密に残るのは、江戸期に幕府の管理からやや遠ざかったことにより、かえって前の時代の歴史が由緒として強く印象づけられたことによるものかと考えられる。

しかし、向日市域の西国街道は、ことに人々の生活が安定してきた17世紀末以降、西山に点在する古刹寺院や神社へ参詣する人々、また摂津方面から都へ上る人々の往来で賑わうようになる。地元乙訓地域の人々にとっても、日々の生活の中で京都との関係は密接であり、都との重要な交通路として機能した。

今日伝わる江戸時代の絵図には、西国街道（「唐海道」と表記される）の道幅を「式間半（約4.5m）」とするものがあり、周辺のほかの道が1間から、広くても1間半であるのに比べて、やはり広く大きな街道であった。

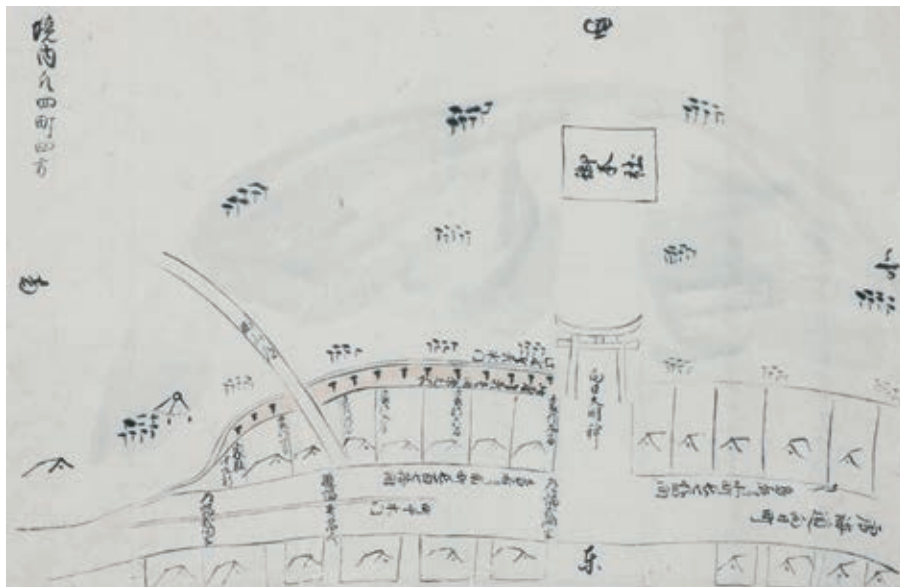


図2-3-1-5 海道悪水溝付替絵図元禄10年(1697) (向日神社文書)

西国街道は、明治時代に入って大正期に至るまで、向日市域と乙訓地域にとってもっとも重要な道であり続ける（図2-3-1-2「明治22年(1889)頃の乙訓」参照）。ことに向日市域においては、明治9年(1876)に市域北東部の寺戸^{くぐそう}久々相の地で西国街道と交わる地点に、東海道線の停車場として向日町駅が開業したことにより（第3章第6節参照）、街道を通して鉄道の駅へと人やモノの流れがより活発になり、西国街道はさらに活況を呈するようになった。

やがて昭和期に入ると、新しい交通手段として現れてきた自動車の通行にも対応するような新道が、西国街道に沿って部分的にはあるが整備されるようになる。向日市域においても、昭和10年(1935)頃までには西国街道と交差しながら新しい道筋が作られ、自動車の普及とともに交通量は新道の方が多くなって、現在に至っている。

併行して新道が建設された部分、向日市域では寺戸町の梅ノ木・野辺町、^{かいで}鶏冠井町^{かえでばた}楓畑南部、上植野町河原町などは、後で触れるように自動車の通行も少ない落ち着いたたたずまいが残るまちなみとなっている。これに比べて、古くから街道沿いやその裏道にもまちなみが密集し、商店も多く賑わい

をみせていた向日神社周辺の向日町や、ＪＲ向日町駅と阪急東向日駅との間の西国街道沿いは、並行する新道が作られなかったために、今も交通量が多く、まちなみとしての歴史は古く記録も残るものの、新規の開発が目立ちつつある場所となっている。しかし、歴史的な場所として西国街道沿いのまちなみのなかでは重要な地点であることには変わりがない。

2 鶏冠井の日蓮宗と題目踊

本市域を西国街道が通過していることによって、また特に街道沿いの鶏冠井の集落が都からほど近い距離に位置するという立地上の特性によってもたらされたのが、日蓮宗の信仰である。鶏冠井の日蓮宗は、単に宗教的な信仰の問題に留まらず、生活文化全般に大きな影響を与えている。その信仰に係わる文化財には、古文書や典籍・絵画をまとめた歴史資料、そして題目踊などの民俗文化財と多くのジャンルにわたって質の高いものが伝来しており、本市を代表するまとまりのある文化財である。また寺院建築は、密集した市街地のなかにあって歴史を感じさせる貴重な景観の要素となっている。

(1) 日像上人の布教と説法石

鎌倉時代までに成立した仏教の諸宗派のなかにあって、唯一関東で興った日蓮宗は、宗祖日蓮の孫弟子にあたる日像が、宗祖の遺命を受けて都での弘通のため、鎌倉時代の末期に上洛し布教活動始めた。しかし、叡山など旧仏教勢力の妨害に遭い、たびたび洛外追放の処分を受けることになった。処分を受けて洛外に赴いた日像が、都から出る街道を歩いてほどなく到達した集落で布教活動をした結果、日像の教えに帰依して一村を挙げて日蓮宗に改宗する集落が生まれる。日像から直接教えを受けた関西最初の日蓮宗集落という由緒を誇る村々が、松ヶ崎や鷹ヶ峯、あるいは深草など、京都周辺の街道沿いに立地するのはこうした事情によるもので、西国街道沿いの鶏冠井の集落も、その中の1つである。

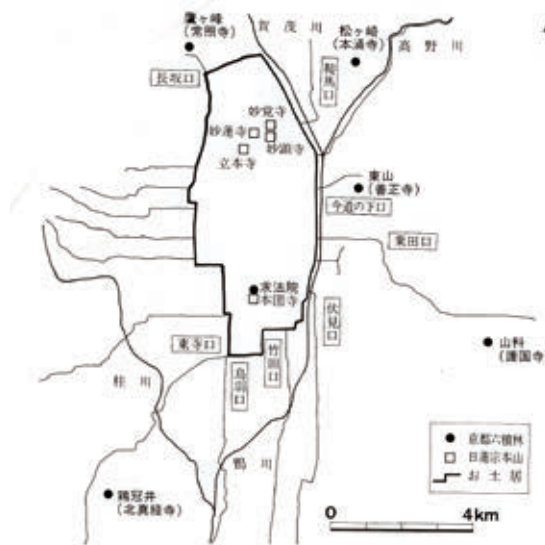


図 2-3-2-1 京都とその周辺の日蓮宗集落（近世京都六檀林位置図）

日像が鶏冠井にやってきたのは、鶏冠井の記録では徳治2年(1307)、江戸時代の宗内の記録では延慶3年(1310)のこととされている。洛外追放にあつて西国街道を南下してきた日像が、向日神社の前にさしかかった時、向日明神が老人や鳩に姿を変え、日像の足を止め、この地で説法をするように促したとされる。新しい勢力が地元根を下ろす時の由緒が、その土地の地主神が媒介することになっている点で極めて興味深い事例であり、西国街道と向日神社、そしてその鳥居前東側に接する場所にある鶏冠井の立地との関係性をよく示している。



図 2-3-2-2 西国街道と向日町 向日神社と鶏冠井の位置関係

その歴史を物語るものとして、神社の鳥居脇に安置されているのが、この地で日像が腰掛けて説法したと伝わる説法石である。もとは神社参道の中ほどにあったというが、大正 10 年（1921）に地元の日蓮宗寺院である法華寺・石塔寺・南北両真経寺の住持が協力して、日像布教の顕彰のため、街道沿いの目立つ場所に台座と石柵、標柱などを整備して安置したのが、今日の状況である。説法石は、西国街道・向日神社・鶏冠井の日蓮宗の歴史的由緒と地理的関係性を体現する貴重な史跡である。



写真 2-3-2-1 向日神社の鳥居脇にある日像説法石①



写真 2-3-2-2 向日神社の鳥居脇にある日像説法石②

（2）南・北両真経寺

日像の布教によって改宗したのは、当時鶏冠井にあった真言宗寺院、真言寺の僧侶実賢で、寺の名を真経寺と改め、この時、村人もこぞって日蓮宗に改宗した。近世以前の真経寺の場所は、はっきりとはわかっていないが、西国街道から東へ約 500 m 離れた鶏冠井の古くからの集落の中にあつた。

豊臣期に西国街道の整備が行われると、同時期に向日神社の向かい側（東側）のまちなみの背後に、興隆寺が創建される（図 2-3-2-2 「西国街道と向日町」参照）。秀吉と同じ尾張出身で、京都にあった本山妙顕寺の貫首であった日堯によって開かれたこの寺は、向日町の町裏に広大な寺域を有する寺院であったが、京都の町衆らを信者に持ち、鶏冠井村民の信仰との関わりは薄かったようである。

しかし江戸時代に入ると、鶏冠井集落の中にあった真経寺が、興隆寺の寺域の一角を借りる形で移転してくる。現在の南真経寺がこの寺で、境内には寛永 19 年（1642）造立の開山堂と正徳 4 年（1714）に完成した本堂が建つ。移転時に新しく造立された建造物である（いずれも京都府指定文化財）。

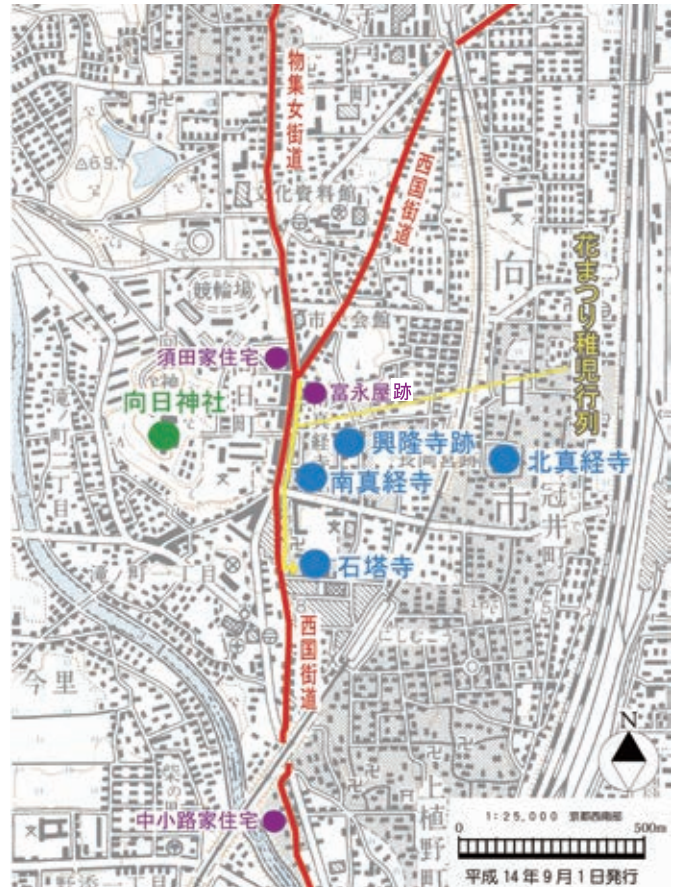


図 2-3-2-3 西国街道と日蓮宗寺院

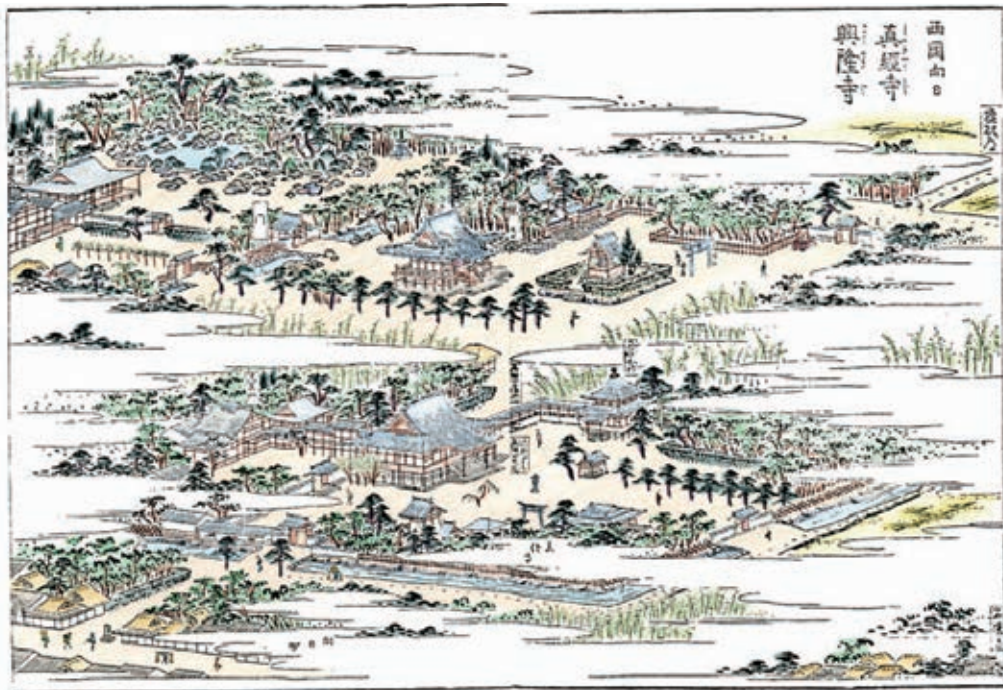


図 2-3-2-4 西岡向日真経寺・興隆寺 右下が南真経寺
天明 7 年（1787）「拾遺都名所図会」から

南門を入って正面に建つ開山堂は、入母屋造・本瓦葺で、寛永 19 年（1642）11 月 13 日建立の棟札が残されている。前面一間分を広縁にとり、正面中央三間分を腰高結界に^{しとみど}、両脇間を引違戸とする。

内部は中央奥の三間分を内陣とし、その両脇を古い形式の脇仏間とする。移転後、最初に建った建物で、日像を本尊に祀るため開山堂とするが、実際は本堂として機能している。京都では深草宝塔寺に次いで古い日蓮宗仏堂といえる。

開山堂の右手脇に建つ本堂は、宝形造・本瓦葺で重層の建物である。南真経寺に残る記録により、正徳4年(1714)に完成していることがわかる。江戸時代には日蓮や日朗の像を安置し、祖師堂としての役割を果たしていた。江戸中期の名所図会では「鬼子母神」と呼ばれるなど、建物の機能や呼び名は、時期によって異なっていたようである。

この他境内には、元禄12年(1699)建立の鐘楼や天保12年(1841)とされる客殿などが並び建つ。



写真 2-3-2-3 南真経寺開山堂・本堂



写真 2-3-2-4 南真経寺本堂

もとの真経寺の北側には、日蓮宗僧侶の修学施設である檀林が、承応3年(1654)に開講した。江戸時代の日蓮宗の檀林は、関東の八檀林と京都の六檀林からなり、鶏冠井檀林は京都の中で、一番最後に開講し、正式には「鶏冠井山北真経寺学校」と称された。興隆寺境内に移転した村人の信仰の中心としての真経寺は、特に区別する時には南真経寺と呼ばれるようになった。

現在の北真経寺の本堂は、檀林時代の講堂にあたる(京都府登録文化財)。寄棟造・本瓦葺で、檀林が正式に開講する以前の正保5年(1648)にさかのぼる棟札が残る。延享4年(1747)に規模を拡張し、この時に屋根を瓦葺にしている。堂内の長押上部の壁には、檀林時代の学僧の名札などが掛かり、当時の面影を今に伝えている。

南真経寺の開山堂・本堂と、北真経寺の本堂は、本山以外の寺院建築としては、いずれもたいへん規模が大きく、偉容を備えており、鶏冠井の日蓮宗信仰の歴史の奥深さを物語っている。

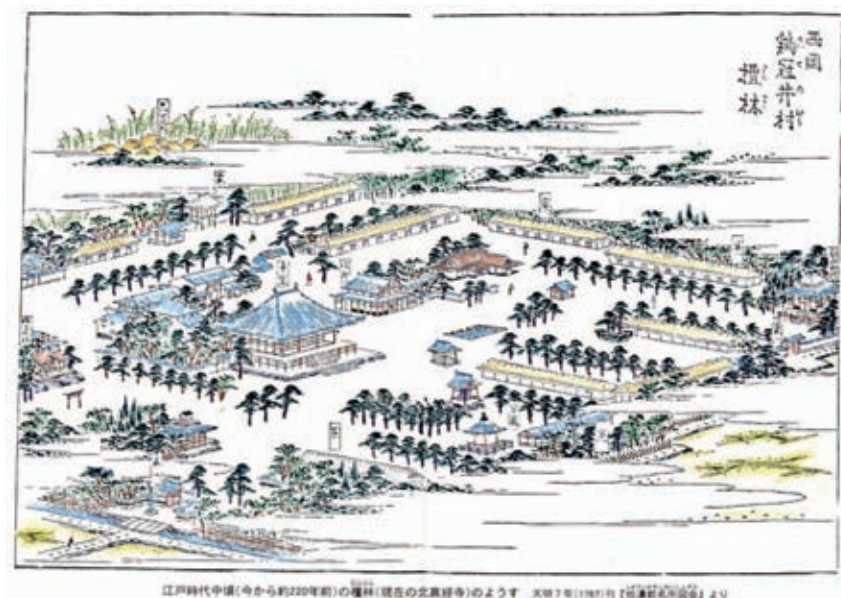


図 2-3-2-5 鷄冠井村檀林天明 7 年 (1787)「拾遺都名所図会」より



写真 2-3-2-5 北真経寺本堂

余談であるが、現在の南・北両真経寺の位置関係は、どちらかといえば東・西である。それを南・北と称するのは、江戸時代初期の檀林開講以前、鷄冠井に真経寺とは別に「談義所」という一種の修学施設があったこと（「京妙顕寺末寺帳」）と、北真経寺檀林の東南に接する場所にもとの真経寺が立地していたとする江戸時代の覚書（南真経寺文書）の記述とを考え合わせると、移転以前の真経寺と談義所の位置関係が南・北に並んでいたことによるものと推測されている。

明治 8 年 (1875) の檀林廃止後は、一部の檀家が南真経寺から分かれて北真経寺の維持にあたるようになり、今日では南・北真経寺合わせて鷄冠井の日蓮宗の伝統を護持している。

(3) 御霊宝ごれいほうとお送り・お迎えの行事

日像の布教によって改宗した鶏冠井の日蓮宗の由緒をよく示しているのが、南・北両真経寺共有の「御霊宝」(向日市指定文化財・歴史資料)と呼ばれている宝物群である。

鶏冠井村民宛の日像直筆の本尊曼荼羅まんだらや、日蓮・日像の肖像画、日像の修学ノートである秘蔵抄とともに、南北朝時代の法華経(法華経のみは国指定重要文化財)などがあり、日像直檀あかしの証として、今日なお両寺の檀家によって厳重に守られている。鎌倉末期の改宗以来、700年間の長きにわたって、鶏冠井の人々の手により、鶏冠井の地で伝えられてきた貴重な文化財である。

古老の話では「御霊宝」を収めた惣箱そうばこは、かつては外出しない老女がいる檀家の家々で、1か月交代で預かれていたという。いつの頃からか南北両寺で行き来するようになり、現在ではほぼ2年ごとに交代で預かる。

惣箱の蓋は封印された鍵が掛けられ、両寺の総代が全員揃わないと開けられない決まりである。

交代の時には総代が運ぶ。受け入れる方の寺では、尼講と呼ばれる女性の檀徒うちわだいこが団扇太鼓で迎え、箱が開けられ宝物をひろげて法要の後、しかるべき場所に安置される。



写真 2-3-2-6 「御霊宝」一式



写真 2-3-2-7 南真経寺から送り出される御霊宝



写真 2-3-2-8 北真経寺で御霊宝を迎え入れる様子



写真 2-3-2-9 法要の様子

(4) 石塔寺

向日町のまちなみの南端東側、つまり鶏冠井地区の南西角に位置し、西国街道に向かって門が開く石塔寺(図 2-3-2-3 「西国街道と日蓮宗寺院」参照)も、日像による布教以来の歴史を誇る日蓮宗寺院である。

現在、境内の門を入って右側の堂内に「南無妙法蓮華経」の7文字を刻んだ題目石が安置されている。日像は、京都七口に通じる街道沿いに題目を刻んだ石塔を建てたと伝わる。東寺口に通じる西国街道沿いのこの地に建てた石塔が、すなわちこの題目石で、石塔寺は、題目石への信仰から起こったとされている。江戸時代には、西国街道を挟んで西向かいに「御塔堂」があり(図 2-3-2-2 「西国街道と向日町」参照)、題目石はそこに安置されていたようである。明治時代以降に、向かい側の寺敷地がな

くなり、東側に移転したものとみられる。



写真 2-3-2-10 石塔寺前の道が西国街道写



写真 2-3-2-11 石塔寺境内 題目石



写真 2-3-2-12 石塔寺の庫裏



写真 2-3-2-13 石塔寺の御塔堂（花まつりにて）

石塔寺は、江戸時代前期には、南・北両真経寺とは異なる苦難の歴史を歩んだ。江戸幕府が切支丹とともに禁教とした不受不施の教義を堅守したからである。他の宗派・宗教との関係に厳しく排他的とされる日蓮宗にあっても、もっとも純粋に法華信仰を貫くことで知られるのが不受不施派で、江戸前期には妥協的な受不施派と形勢を二分していた。幕府は不受不施派を次第に迫害するようになり、寛文年間（17世紀後半頃）頃には徹底的に弾圧する。その時期、石塔寺は諸国に30以上の末寺を抱える中本山で、不受不施派の法灯を守り続けた。結局、元禄4年（1691）には受不施派への転向を余儀なくされ、両真経寺と同じ妙顕寺の末寺に組織されることになる。

このように石塔寺は、鶏冠井の日蓮宗寺院ではあっても、南・北両真経寺とはやや異なる側面を持っている。同じく日像の布教以来の古い歴史を誇るが、その檀家は、近世初頭から向日町に移住してきた西国街道沿いの商家や昭和期以降に転居してきた新住民の子孫である家々が多いのが特徴である。西国街道との関係性は、ある意味ではもっとも深いといえる寺院である。

本堂は新しく鉄筋コンクリート造に建て替えられており、文化財建造物はないものの、大きな妻飾りを見せる庫裏や、鐘楼などの建物がこぢんまりした敷地内に配置されている。いつも美しく整えられた境内は、本市域の西国街道沿いにある良好な景観を提供している。

石塔寺の門前から南へ向かう坂道が、通称島坂と呼ばれる場所で、長岡京期には造営長官であった藤原種継が暗殺され、平安時代には京都へ向かう紀貫之が宴を催したとされる地である。石塔寺とそ

の周辺は、西国街道の中でもさまざまな物語を秘めた地となっている。

なお、近世初頭に向日町の町裏に境内を占めた興隆寺は、江戸時代を通じて境内も広く立派な伽藍を誇る寺院として栄えたが、明治8年（1875）に廃寺となり、寺籍や什物は石塔寺の管理となって今日に至っている。跡地には、歴代や檀家の墓石や、築地塀の跡とみられる土塁が残されている。

（5）鶏冠井題目踊

日像の教えにより改宗した村人の歓喜の様子を表すものとして伝わるのが題目踊（京都府指定無形民俗文化財）である。「南無妙法蓮華經」を唱えて踊る念仏踊は、京都市内各地や全国的にも数多く伝わるが、題目踊は、京都近郊の修学院、松ヶ崎と、当地鶏冠井の3か所にしかみられない貴重な民俗芸能である。中でも鶏冠井の踊りは、輪になって盆踊り形式をとる他の2か所と異なり、本尊に向かい整列して踊る特徴を持ち、歌詞や舞姿に室町期の古様を良く伝えていると評価されている。

音頭の内容は、教義の平易な解説を意図しているが、口調はあくまでも室町小唄風で、「閑吟集」などの中世後期の流行歌謡を連想させ、当時はやった風流踊との共通性をうかがわせる。当時にさかのぼるような記録が発見されることは、今後においても難しいが、題目踊の起源が江戸時代以前にさかのぼることは、現在の歌詞や踊り方の中に認められるところである。

歴史的に確実な資料としては、鶏冠井の各家々に残された音頭本があり、明治24年（1891）や大正9年（1920）の写本が確認されている。また、昭和10年（1935）前後とみられる映像フィルムの断簡のなかに、おそらく石塔寺の庫裏とみられる建物の前で、少年たちが題目踊を踊る姿が写されている。題目踊は、かつては鶏冠井の檀家各家の長男のみによって踊られていたという話が伝わり、少なくとも昭和前期にはそうだったことを示す映像である。

現在は毎年5月3日の花まつりの日に石塔寺本堂内で踊られているが、本来、南北両真経寺の檀家が、御霊宝を各家輪番で保管していた頃には、御霊宝のご開帳にあたって、南・北真経寺で交互に踊られていた、ともいわれている。

昭和40年（1965）代初頭頃までには途絶えておりほとんど断絶しようとしていたところ、40年（1965）代の半ばに復興の機運が盛り上がった。家々に残っていた音頭本と、わずかに存命であったかつての音頭取りや踊り手によって再興され、現在では毎年5月3日の石塔寺の花まつりにおいて上演されているほか、求めに応じて各所で披露されている。音頭取り・踊り手の高齢化が進み、後継者が少ない悩みがあるものの、近年では若手のメンバーも数少ないながら加わる姿もみられる。

毎年、石塔寺の花まつりは、檀家である西国街道沿いの向日町の人々の手で催され、近隣の人々が集まる簡素な中にも賑やかな行事である。日像が布教時に立てたと伝わる題目石を安置する御堂もある境内で、多くの人々に見守られながら披露される題目踊もまた、西国街道と日蓮宗の関わり、その歴史と地理と文化を、いきいきと今日に伝える風景である。



写真 2-3-2-14 少年たちによって踊られる昭和戦前期の題目踊の様子
（映像フィルム断簡から）



写真 2-3-2-15 花まつりで披露される題目踊①



写真 2-3-2-16 花まつりで披露される題目踊②



写真 2-3-2-17 花まつりで披露される題目踊③



写真 2-3-2-18 花まつりの稚児行列

3 西国街道沿いの建造物とまちなみ

(1) 向日町のまちなみ

向日神社の鳥居を挟んでその両脇の西国街道沿いには、16世紀末に豊臣秀吉が街道を拡幅整備するのに合わせて町場が整備された。天正20年(1592)8月には、秀吉配下の京都所司代であった前田玄以が、向日神社の前の西国街道沿いに新町をつくることを定め置いている。

江戸時代初期の元和2年(1616)に、北半分のまちなみを調査した記録である上之町渡世書帳^{とせいがきちょう}によれば、200軒内外の商家・職人の家々が立ち並んでおり急速に町場を形成し、賑わっていたとみられる。しかし、近くに伏見の町がつくられ、発展していく中で、向日町の賑わいはやや減じ、以後、上之町と下之町の両町あわせて100軒内外の家々が約600mの間に軒を連ね、乙訓地域の中心的町場として発展することになる。



図 2-3-3-1 天正20年(1592) 前田玄以定書

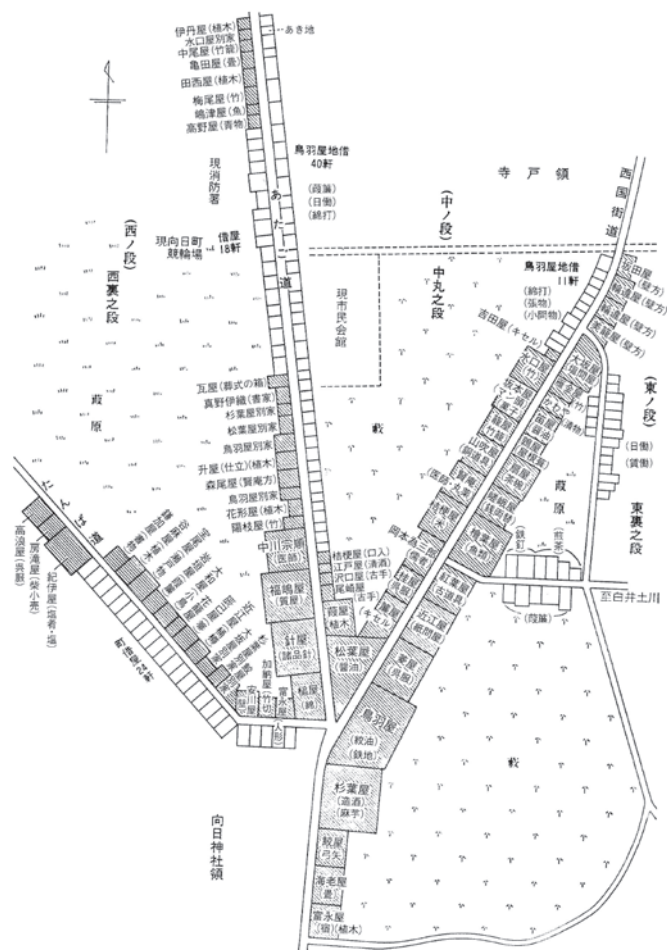


図 2-3-3-3 元和2年(1616) 上之町復元図

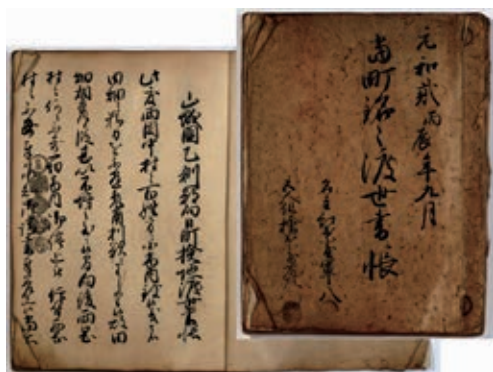


図 2-3-3-2 渡世書帳(表紙と内容)

新しく向日町の住人となった商家・職人の家々は、同じまちなみの中にあり、18世紀以降、受不施に転じ性格を変える石塔寺の檀家となって、その維持発展に務めた。現在、石塔寺花まつりの行事は、向日町の商家の系譜を引く家々が中心に運営にあたり、稚児行列も向日町のまちなみの中を通っていく。

明治時代以降は、郡役所や警察署、郵便局、学校など、さまざまな公的機関が向日町のまちなみの

中につくられることになり、行政・教育の中心としても、ますます乙訓郡内における求心性を高めた。

近年では、向日町部分の西国街道には、並行して走る新道がないことから、車が激しく往来する幹線道路（府道西京高槻線）となっており、両側に家が迫り歩道が狭く、たいへん歩きにくい道となっている。かつて乙訓で一番の商店街として賑わったまちなみも、駐車場の広い郊外型スーパーや、鉄道駅前の商店街に押され、商売をする家もほとんどなくなり、かつての商業の中心地としての繁栄は見る影もない。しかし、向日神社や南真経寺のある界限は、やはり今なお本市を代表する歴史的なまちなみといえる。



図 2-3-3-4 幕末の下ノ町のまちなみ（復元透視図）



図 2-3-3-5 南東から見た昭和 10 年 (1935) 頃の向日町まちなみ復元模型

（２）須田家住宅（京都府指定有形文化財）

松葉屋の屋号をもち、江戸初期の元和 2 年（1616）に向日町上之町ですでに醤油製造業を営んでいたことが、記録によって確認できる古い商家である。その時には、西国街道と愛宕道（現在の物集女街道）が分岐する、現在の場所の道向かいに松葉屋はあったが、現在の主屋が建立される時期には、愛宕道を挟んで西側の現在地に移転している。

松葉屋の建つ西国街道・愛宕道・丹波道の分岐点付近は、江戸時代の向日町の中でも油屋・醤油屋・酒屋などの醸造業を営む大店が集まるところであった。松葉屋の当主は代々利兵衛を名乗り、向日町上之町の年寄など町の役人を務め、また江戸時代後期の文政期当主は向かいにあった商家鳥羽屋の主

人や同時期の向日神社神官^{むとべよしか}六人部是香らと交流する文化人としても活躍した。

現存する町家は、主屋が江戸中期（17世紀末～18世紀初頭）に建造されたことが、軒に打ち付けられた祈祷札や、屋敷の構造によって確認できる、町家としては古い遺構である。明治期には北端に座敷が増築されている。内部には文人であった当主の教養の高さを示す粋を凝らした意匠がみられる。平成3年（1991）、当主により大規模な修理が行われ、保存・維持に努められている。修理完成当初は当主主催の一般公開事業が行われていたが、高齢化などにより公開継続が難しくなり、現在は長らく閉じられたままとなっている。



写真 2-3-3-1 須田家住宅 外観



写真 2-3-3-2 醤油屋の看板
(江戸時代)

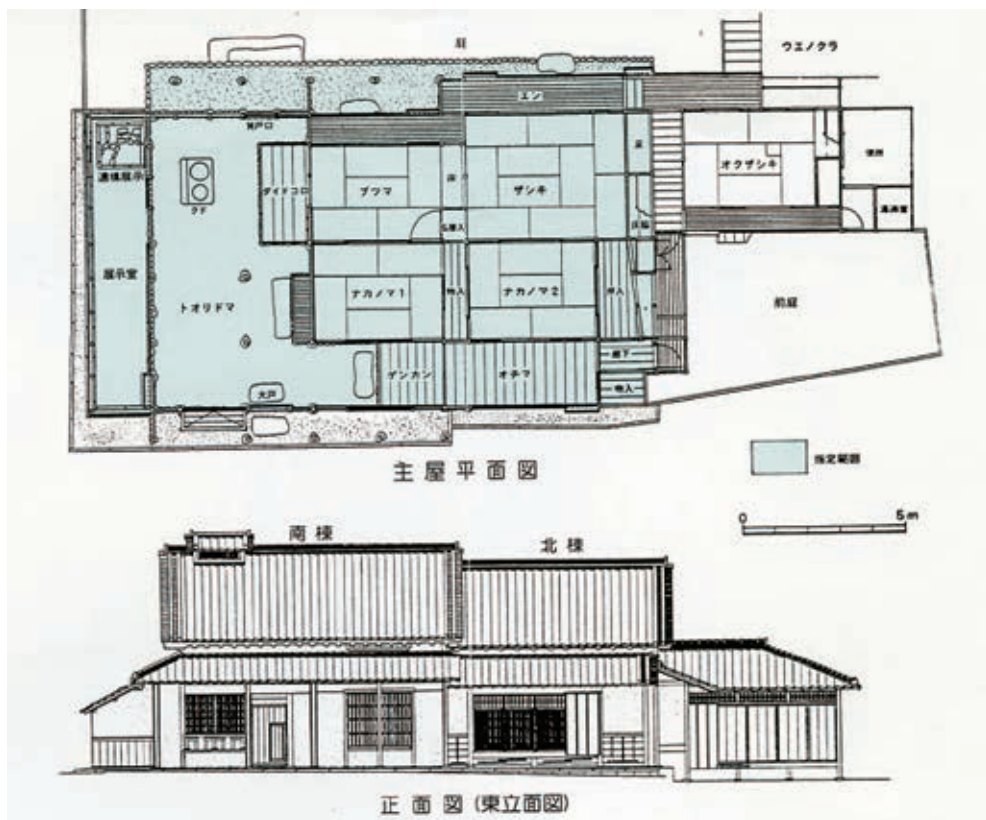


図 2-3-3-6 須田家住宅主屋平面図・正面図（東立面図）



写真 2-3-3-3 須田家住宅裏庭からみた主屋西面



写真 2-3-3-4 ふすまの写真

(3) 向日町富永屋

向日町上之町の南端で向日町草創期から所在していた宿屋の遺構。富永屋は元和2年（1616）の上之町の渡世書帳の最初に登場する家で、当時から同じ場所で宿屋を営んでいたことがわかる。渡世書帳によれば、主屋の後ろ側には裏借家も所有しており、その時点で上之町有数の財産を有していた。おそらく向日町草分けの1軒であったと考えられる。

主屋は、表面の一部にモルタルが施され部分的に店舗に改造されるなど、改変が著しいものの、享保20年（1738）の棟札が残る内部の小屋組は建築当初の部材が残され、大棟の屋根も往事の規模を有していた。江戸時代中期にまでさかのぼる商家として貴重なもので、宿屋としての営業は明治時代に終わっていたが、以後は宴会場・集会所として、昭和30年代までは乙訓郡内の主要な会合場所でもあった。その後、うどん屋などの営業を昭和40年代まで続けたあと、平成22年度（2010）からは、まちづくりの市民グループ「富永屋の会・グループとみじん」が、所有者から建物を借り上げ、各種イベント活動の会場として活用する「向日町富永屋を核として西国街道町並み活性化プロジェクト」を展開していた。

このように、所有者とそれらを支える市民グループ等の努力に加え、市において公有化を検討するなど、多くの人々が関わり、その保存、活用について様々な検討や取組が行われてきたが、維持管理や補修費用が所有者にとって大きな負担となるなどの事情により、町家遺構は令和2年1月に解体され、集合住宅が建設されることとなった。



写真 2-3-3-5 富永屋店棟建物全景（南西から）



図 2-3-3-7 元和2年（1616）
渡世書帳にみえる富永屋



写真 2-3-3-6 富永屋座敷



写真 2-3-3-7 富永屋 西国街道ひな人形めぐり

(4) 中小路家住宅（国登録有形文化財）

中小路家住宅は、上植野町下川原の西国街道沿いに立つ、大形の民家である。主屋は弘化5年（1848）に建て替えを願い出た古文書が残り、上質な造りの座敷を備える。当家は約400年前から当地に居住していることが、過去帳や家蔵古文書によって判明し、幕末には上植野村^{しょうごいん}聖護院領の庄屋を務めた。明治期に建てられた長屋門や穀蔵など付属屋が連なり、旧家の屋敷構えを伝える。

中小路家のある、上植野町下川原付近は、すぐ東側に新道（府道西京高槻線）が並行し、車などは主にそちらを通行するため、旧来の西国街道沿いは落ち着いたたたずまいを残している。南隣には江戸時代に西岡大工組の組頭や村庄屋を務めた広大な敷地の旧家、向かいにも虫籠窓や竹の犬矢来を備えた民家がある。東にやや離れた位置に上植野の古くからの集落の本体があり、そこから離れた街道沿いにいわゆる「出町」の形で、街道に面して門をあける家々が並んでいる区域である。

当家は、昔ながらの家屋敷の風情を末永く維持していくために、登録文化財となっている主屋を喫茶スペースとして活用し、付属屋も含めた部分でさまざまなイベントを行い、まちづくり活動を展開している。日常の憩いの場として、また賑やかな行事に参加して、多くの人々が訪れる場所となっている。



写真 2-3-3-8 中小路家住宅 西国街道から



写真 2-3-3-9 中小路家住宅 主屋



図 2-3-3-8 中小路家住宅 現在の配置図（登録時）

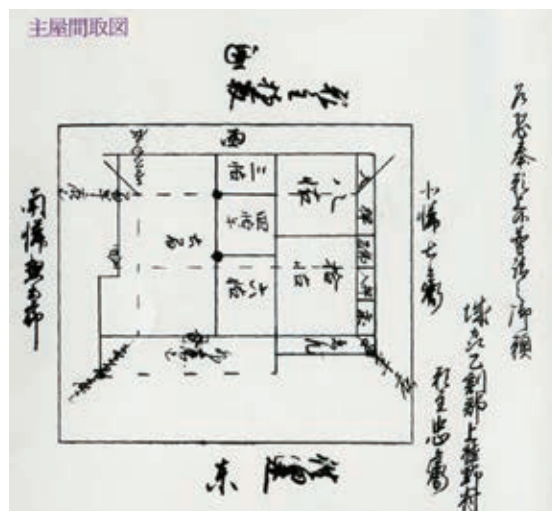


図 2-3-3-9 中小路家住宅 幕末の「主屋見取図」



写真 2-3-3-10 中小路家住宅 現在の主屋内部の座敷

（５）その他の古いまちなみや石造物

向日市内の寺戸や鶏冠井、上植野の西国街道沿いには、江戸～昭和期の町家建築が断続的にみられ、歴史を感じる良好な景観が形成されている。向日市では、平成４年（１９９２）に上植野町河原町付近の西国街道を「歴史の道」として、石畳や趣ある街灯により整備した。平成２３年度（２０１１）からは、寺戸などで西国街道をモチーフにして、石畳風のカラー舗装を実施するなど、街道のイメージを活かした道路整備事業を実施している。

また沿道には、江戸時代から当地において盛んである愛宕講によって町内ごとに建てられた石燈籠が数多くみられ、大正時代の道路元標などの石造物もある。眼病に霊験があるとして信仰を集めた西山楊谷寺（現長岡京市）への分岐点である向日町五辻には、幕末に建てられ、昭和４０年代（１９６５～１９７４）の道路拡幅によって移転していた大燈籠を、地元住民の熱意により元の場所に里帰りさせるなど、街道沿いの雰囲気復活させる取組みも、近年みられるようになっている。



写真 2-3-3-11 上植野町下川原のまちなみ



写真 2-3-3-12 上植野町下川原の西国街道と愛宕灯籠



写真 2-3-3-13 五辻常夜燈・柳谷燈籠



写真 2-3-3-14 石塔寺の北側、鶏冠井町楓畑のまちなみ



写真 2-3-3-15 向日町道路元標

4 まとめ

向日市域を北東から南西へ縦断する西国街道は、市域を通る古くからの街道の中でも、ことに市民に親しまれている歴史ある道である。街道を通して人やモノが往来し、新しい文化が本市域にもたらされた。

その中でも後世、ことに大きな影響を与えることになったのが、鶏冠井にもたらされた日蓮宗の信仰である。鎌倉時代末期、日像の布教によって一村すべてが日蓮宗に改宗した鶏冠井では、それまでの真言寺を改めて真経寺が興り、日像から授けられた宝物がもとになった御霊宝を、村民自身の手で

700年間守り伝えた。改宗の喜びを表現した題目踊は、室町後期に流行した風流踊の流れをくむ、全国的にも貴重な民俗芸能である。真経寺は、江戸時代に入って、それまでの集落の中に僧侶の学校である檀林、西国街道に接する場所に南真経寺を造営し、両寺の伽藍は本市の代表的な寺院建築である。

日像が布教した遺跡地も西国街道に点在し、その1つといえる石塔寺では、檀家である向日町の人々が中心になり、毎年初夏の花まつりの行事が営まれる。向日町上之町から下之町にある石塔寺に向かって、向日町のまちなみの中を稚児行列が練り歩き、街道沿いに穏やかな文化の彩りを添えている。向日町のまちなみの北側には寺戸野辺町、南側には鶏冠井楓畑や上植野下川原と、昔ながらの風情を備えた建物が残る地区が続く、路傍には燈籠や道路元標など石造物が点在する。

西国街道沿いに日像の布教に係わる遺跡地が点在し、向日町のまちなみの中や背後に石塔寺や南真経寺の伽藍の大きな屋根が溶け込み、その景観の中を御霊宝を守り、釈迦の誕生を祝う行列が行く光景は、京都近郊地としての本市の歴史と文化の一端を象徴する歴史的風致である。

コラム 勝山と太閤伝説

向日神社のある向日丘陵の先端部は、江戸時代には「向日山」と呼ばれたが、別名を「勝山」といった。これは、豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に西国街道を通して向日神社の前までやってきた時、この山を見て名前を尋ねたところ、神官が出陣の門出にと、とっさに勝山と答え、秀吉がたいそう喜んだ、という話に由来する。この話は、江戸中期の地誌「山州名跡志」^{さんしゅうめいせきし}に掲載されており、当時から地元では言い伝えられていた。秀吉の西国街道拡幅と向日町の整備の史実にちなむ興味深い話である。

近年の史料調査で、秀吉出陣当時の記録が相国寺の禅僧の日記「鹿苑日録」^{ろくおんにちろく}の中にあり、それによれば秀吉が出陣時に向日明神の前にあった茶屋で休息をとり、見送りにきた甥の関白秀次に「瓢箪の指物」^{ひょうたん さしもの}を譲っている史実が明らかとなった。勝山の話は、こうした史実を背景に成立したものであるとみられ、西国街道と向日神社、向日町に関わるたいへん興味深いものである。